

九の非凡の力量に感じて之を家来となし、坂田金時と命名して四天王の一に加へ、金時を先導として江州高懸山の悪魔を退治す。功を以て鎮守府將軍に任ぜられ、勅諭によつて岩倉大納言兼冬卿の女選湯姫と婚す（堀山姫）

多田滿仲の嫡子なり。勅命を受けて相馬二郎將門が執念の變化惡魔を射る。家督相續を頼信と定む。頼平が兇賊將軍太郎良門と一味せるを捕へて死罪に處せんせしが、頼平の乳母及び箕田二郎權の深く頼平を思へる心を憐んで罪を赦し、頼信・頼平・保昌等をして葛城山に良門・土蜘蛛を攻めて之を退治せしむ（關八州擊馬「らいくわう」をも見よ）

よりよし 源賴義。性確直なりしがは平師氏の讒に遭ひ、賴勸の身となりて自殺せんとせしが、家臣平井清春等に謀められて思止り、渡邊武綱、坂田公時、平井清春等を従へて、京師を出で、落ち行く途中、平師秀の兵に長坂に襲撃せられて之を破り、若狭國小濱に赴きて連見列官唯光に便る（大掛物十幅一對）

らいりん 荒土佐坊雷雲。吉野坊主なり。総攝萬九郎の宅を襲ひ、萬九郎の妹長歌を奪ひて春登輝に奉らんとして擲めらる。後、夏仁親王を春日山に襲撃し、親王に化けたる神鹿を斬りて味方の兵に擲めらる（持續天皇歌草）

らいくわう 源頼光。武將なり。加藤兵衛氏細末つて、其女横笛が北白川の廣文といふ浪人にかどはかされて、江州鶴山の遊郭ひらぎ屋長に賣られたることを訴ふ。是時頼光勅命によりて大江山の酒吞童子を退治し、其隣途四天王と共にひらぎ屋に行きて長を捕へ、其髮鬘を賣りて重罪に行ふ（傾城酒吞童

子）「よりみつ」をも見よ。
らいげんほふし 雷玄法師。源義經の愛人東雲の叔父なり。平家の將監物太郎頼方と共に義經を追撃し、田村の官に戰つて死す（源氏烏帽子折）

らうく 郎九。奥州會津者なり。大阪新地料理茶屋の女主人お龜と同じく天王寺屋の妓小菊を連れて野崎觀音に詣で、口三味線であかれ行く途中、一つ橋のあたりにて、河内屋與兵衛及びその友達等に憎氣喧嘩を仕掛けられ、與兵衛の友を毆傷し、與兵衛と撲ち合ひ組み合ひて共に川に轉落し、泥土を掴んで投げ合ふ、與兵衛誤つて通行の武士に禮禮を加へて咎めらるる間に、郎九は川を渡つて琴詣の諸人中に紛れ込み、小菊等を連れて去る（女殺油地獄）

らん 阿蘭。但馬城主の京都の邸に仕へてお節上げを勤む。或夜小萬の媒介によつて菱川源五兵衛と契る。後、比丘尼となりて薩摩に下り、芭蕉布商琉球屋に來り、源五兵衛に刀を投げられて怪夜す。琉球屋の娘お萬が源五兵衛の後を追うて裏扉を越えたる際、帶松枝に懸りてぶらさがる。お蘭乃ち布を松枝に投懸けて之を助く（薩摩歌）

らんぎよく 蘭玉。萬禮の妻なり。阿克將より剪の陳芝約を誘ふ書状と暗略を得て、其暗略を返し、書状を隠さんとせるを陳芝約に見付けられて羊に食はしむ。陳芝約これを不義の文と疑ひ、羊を割きて其書状を讀む。

らんぎよく 蘭玉。萬禮の妻なり。阿克將より剪の陳芝約を誘ふ書状と暗略を得て、其暗略を返し、書状を隠さんとせるを陳芝約に見付けられて羊に食はしむ。陳芝約これを不義の文と疑ひ、羊を割きて其書状を讀む。

其日甘輝 永感帝に從ひ來り訪ふ。蘭玉之を愛慮せんとし、他刀を研ぐを甘輝に疑はれて斬付けらる。後に萬禮の跡を尋つて東華島に渡る。或日甘輝尋ねて來る。蘭玉勇の仇と呼はつて甘輝と格闘す（國性爺後日合戦）

りうかくん 柳歌君。明の大司馬將軍吳三桂の妻なり。逆臣李昭天が健闘兵を導きて帝及び華清夫人を弑すや、柳歌君即ち梅樞皇女を連れて海道の港に遁れ、敵の追擊軍と戰つて其將副將を殺し、皇女を舟に乘せて遁れしむ（國性爺合戦）

りかいほう 李海方。李昭天の弟なり。兄と共に反して魏羅に内通し、明を滅さんとすして吳三桂に殺さる（國性爺合戦）

りくあんわう 劉乃耶六安王。福建の國主なり。性驕戻にして苛政を行ふ。臺灣國せうほが池中より引上げたる大鼎を潰して寶劍を作らんとし、刀工を集めて刀を作らしめ、其利鈍を試すに無辜の民を斬り、歐陽蘇思が極諫せるを怒つて之を殺し其肉を鹽にす。皇一黃兵を繼ぐに及んで其臣歐陽哲を捕へ、鹽を出して汝が父の肉なるを告げて之を食はしむ。是時朱一貴の軍福建城に來襲す。六安王戰敗れて滅ぶ（唐船斬國性爺）（知府臺灣長官王珍政を怒り苛税を課し、民心離叛したるを傳聞御色したるなり）

りたふてん 李踏天。明の右將軍となりて反逆を企て、魏羅を襲きて思宗列皇帝及び皇后華清夫人を弑し、皇族思臣を亡して自ら國王となる。後、南京城に於て國性爺等に襲撃せられて敗れ、捕はられて酷刑に處せらる（國性爺合戦）

備後町の鍛冶職なり。手代平兵衛かねて悪所狂ひをなすを知つて案ぜらる。平兵衛が藤多の寶劍の裏金を誑合へるを怒りて之を放逐す（心中双は水の朔日）

りん 林。河内國道明寺の老尼なり。或日虛無僧來り和琴の前を預けて去る。尋いで龍門家の後室及び舞樂の前來つて此寺の尼となる。是時石川五右衛門幼兒を賣買ひて寺内に監込み、大釜の中に醜れしを官人追及して縛し去る。是に於て林は龍門家の後室等と共に刑場に行き、幼兒の赦免を哀訴す（傾城吉岡梁）

るりせんぢよ 瑠璃仙女。林丹の妻なり。須達長者の下女となりしが、佛法を信ずるの故を以て放逐せらる。釋尊頭陀の道に遇うて實の一燈を挑げ、遂に佛果を得（釋迦如來誕生會）

れいせい 冷泉。浮瑠璃御前の乳母なり。浮瑠璃御前と牛若との情事につきて斃旋す（孕常盤）

れいせい 冷泉。浮瑠璃御前の乳母なり。浮瑠璃御前の侍女なり。姫と牛若との情事に就いて斃旋す。後、姫に從ひて塚の藥師の笹舟に隠れたるを、藤太に見付けられて斬られんとしたるを三條の吉次僧高に助けらる。また牛若に逢うて浮瑠璃御前の死を語つて悲しむ（十二段）

備後町の鍛冶職なり。手代平兵衛かねて悪所狂ひをなすを知つて案ぜらる。平兵衛が藤多の寶劍の裏金を誑合へるを怒りて之を放逐す（心中双は水の朔日）

るりせんぢよ 瑠璃仙女。林丹の妻なり。須達長者の下女となりしが、佛法を信ずるの故を以て放逐せらる。釋尊頭陀の道に遇うて實の一燈を挑げ、遂に佛果を得（釋迦如來誕生會）

れいせい 冷泉。浮瑠璃御前の乳母なり。浮瑠璃御前と牛若との情事につきて斃旋す（孕常盤）

れいせい 冷泉。浮瑠璃御前の乳母なり。浮瑠璃御前の侍女なり。姫と牛若との情事に就いて斃旋す。後、姫に從ひて塚の藥師の笹舟に隠れたるを、藤太に見付けられて斬られんとしたるを三條の吉次僧高に助けらる。また牛若に逢うて浮瑠璃御前の死を語つて悲しむ（十二段）

れうくわう 扇屋了空。大阪新町九軒町の

遊廓扇屋の主人にして、名妓夕霧の抱主なり。夕霧病篤き際、扇屋伊左衛門の母妙順及び平岡左近の妻幸より夕霧を請出さんとして金を送り来る。了空其金を私せずして夕霧に與ふ(夕霧阿波渡魂)

れうしゆん 今川伊豫守貞世入道了

病篤き及び、青砥五郎藤次を土民より拔擢し、之を重用して後事を託し、子の仲秋及び舎弟貞廣等を呼集めて懇に遺言し、連判起調文を繕かきしめ、之を富士権現の寶殿に納めしめて逝去す(今川了俊)

れんにんあじやり 蓮任阿闍梨。數

馬山東光坊の僧なり。梶原景季に呼出されて醍醐前を隱匿せしかの訊問を受けて、隱匿せざること陳述して景季を罵罵し、憤然として去る(藤原内膳)

ろくぞう だんだら六藏。馬方なり。

田村將軍の室及び其乳母長良局を馬に乗せて土山を行く際、荒金刑部山國に擊殺せられ、騷戦して山國の部下鳴瀬源五三谷平六を殺し、田村將軍に従ひて、鈴鹿山の惡鬼追治に儀勲を立て、雖て千手觀音と化現し光明を放つて虚空に去る(田村將軍初觀音)

(序云、六藏は馬士の通稱なり。)

ろくさう 腕の六藏。騾路の馬方なり。

美濃國札の辻にて酔ひ臥せる間に、春主來つて馬を奪ひ、己が衣服と着替へて走る。六藏目覺めて馬なきに驚き、難の郡司、冷泉坊法師等と何れも思ひ違ひして聞ひしが、其實を知るに及んば相和し、共に春主の行方を尋ねて捕り都に上り、朝廷より御座の長從六位(藤大匠)位附生を授けらる(藤大匠)

ろくらう 八幡六郎。關谷判官高貞の臣

人名部

なり。主君切腹の後、主君の奥方を助けて吉田兼好の庵籠を訪ひ、侍従といふ女の名を高貞の奥方の首のやうに見せて師直の追手小林民部を欺きしが、敵其實を知つて兼好の庵籠を包圍す。六郎奮戦して之を破る(兼好法師物見車)

(序云、赤穂城主淺野内匠の臣大石内藏介良雄をかく作かへたるなり)(ゆらのすけ)の條と併せ見よ)

ろくらう 「しげきよ」を見よ。

わかむらさき 若紫。京都九條北町柏屋

の遊女なり。源經と情交密なりしが、佐藤忠信に頼まれて其意に従ひ、心ならずも經の席に出づるを避けて經に罵られ、世上のままならぬを嘆きて尼となり、貞順と法名す。忠信が其妻花紫と逢に逢うて遊女の浮薄を罵るを、若紫隨で立聞きして忠信に怨みを言ひ、花紫と共に大和路をさまよひ、吉野の御堂にて醍醐前に遇ふ。この時山法師等に包圍せられて經の所在を詰問せらる。若紫乃ち我若紫九條の遊女であることを語り、女郎名紫を諷んで免るを得。山中にて經親主従に邂逅せしが、經親に讒されて名残を惜みつつ別る(吉野忠信)

わごんのまへ 和琴前。大和國宇陀郡

龍門家の女にして、舞樂の前の異母妹なり。母が姉を悪むを悲んで家をひのび出て、吉野川に投身せんとせるを石川五右衛門に捕はれて、大阪三軒屋町御手洗屋に賣られて遊女となり吉野と名乗る。或日徳法來つて吉岡と交換せられて、河内國道明寺に連れ行かれ、尋いで母及び姉に遇ふ。是時石川五右衛門幼兒を背負うて寺内に進入り、大釜の中に隠れし

を捕吏追及して縛し去る。是に於て和琴の前は道明寺の老尼等と共に五右衛門の刑場に赴き、幼兒の救済を哀訴す(傾城吉岡染)

わしくに 御藏之介鷲園。泰大臣種房

の臣にして、立上廷尉之介鶴園の弟なり。泊瀬皇子を尋ねて丹後國與瀨郡水の江の浦里に行き、乾平馬寮を追捕ひ、泊瀬皇子に陪從して都に上る。後、雄略天皇に従ひ、葛城山に肩輪手を退治して功あり(浦島年代記)

わしまる 鶯丸。桐か谷の獵夫なり。未

だ乳離れぬ春兒の白鹿を捕獲して犬坊丸に見せ、大藏の虎御前の下駄にて作れる笛には應答することを語り、其笛によつて親鹿をも獲べしとて犬坊丸を手引して山に入る(曾我五人兄弟)

わだまる 太宰太郎和田丸。平城天皇

の御宇豐後國の旗頭なり。官中に召されて蒙古征伐の勅宣を蒙り、百合若の姓を賜はりて大臣に列し、香取丸といふ矢を授けられ、且凱旋の際には官中第一の美女立花を妻となすべしとて天蓋を賜はる。是に於て百合若出征に上る途次牛頭天社に詣でて戦勝を祈り、遙に宇佐八幡宮に武運長久を祈り、其夜家士の別府雲之足雲霧兄弟の反逆を夢む。かくて後蒙古征伐に大功を立てしが、別府兄弟の反逆によつて還國の矢の日を送ることとなり、藤丸と云ふ雌鷹の月の精の化けたる立花と同様して子の還城丸をまらけ、親子三人孤島に暮すこと四年間。或日我子の武運を祈りて放ちし矢、計らざるも百合若を尋ねて来る秀虎の船に命中して秀虎と逢ふ。かくて船に打乗つて本國に歸らんとする際、別府雲霧蒙古の寇に襲撃して來襲す。即ち戦つて之を殺し、都の方

(飛ぶ鷹が巨官に船を走らう。歸國の後別府雲足を誅す。朝廷其武功を嘉し給ふ(百合若)(舞之本百合若大臣も脚色せる所多し)

わとうない 和藤内。藤芝龍一官の子なり。

逆臣孝絶天及び體親兵の爲に國亂れ、皇妹梅姫女即前の平手に憑着するや、乃ち皇女を妻の小姓に托し、父母に連れられ明に航し、獅子城主甘藷によつて恢復の軍を起し、延平王國性節といひ歸成功と號す。進んで聖門開を越す五十餘城を抜く。吳三桂と九山仙に會し、共に進んで南京城に迫り、李路天子を捕へて永曆に歸し、體親王を獻退して太子を立て、之を永曆帝と云ふ(國性節合戦)

國性節日本風を好む、永曆帝を國性節の子に造營せんとす。また梅姫皇女を國性節の子の名義にて甘藷の後妻たらしめ、其祝宴の席上甘藷より國性節の日本風を好むを意見せられ、怒つて甘藷と絶交し、官を辭し、妻子及び手飼の虎を連れて東渡島に去る途中、勾容縣にて敵將藤原山石運圓の懸撃に遭うて之を破り、東岸に渡つて其島守となる。或日島民に騎馬鐵甲の幻術を信じて金を貰ふ者あるを聞き、萬應に命じてそれ等の者を捕へて生鐵門に肆せしが、刑人中に父の藤芝龍あるを見て、之を赦さんとす。愚案に據る。甘藷永曆帝を連れて城門に來る。國性節乃ち甘藷と和して永曆帝を保護し、體親軍の來襲を擊破す(國性節後日合戦)

(序云、和藤内は朱成公なり。父を藤芝龍と云ひ平手に寓し田川氏を娶つて朱成公を生む。崇禎十一年明に渡り、唐王より忠孝伯に封ぜられ、國姓朱を賜ひ名を成功と改めしむ。世呼んで國姓爺と云ふ。成功永明王を奉じて清に抗す。永明十二年延平王に封

ぜらる。大擧して南京を襲うて敗れ、海に航して臺灣に據り、父の反節を謀めて誅かれず、遂に父を棄てて明に盡し、清聖祖皇帝康熙元年（永明年十六年）齡三十九歳にて病歿す。

（國姓爺合戦は近松の當時最も歡迎せられたり。蓋し場面の変化も人物の配合もよく、支那の風俗生活、我が國人和藤内の剛勇とお國自慢など、總て見物人をして喝采せしめたるよなるべし）

わにがせ 鱒香背。 素戔嗚尊の臣なり。

大山家の女木花開耶姫を尊に奉らしめめとして大山祇と口論す。濱山に悪鬼退治の軍に従ひ悪鬼に恐れ逃ぐ。後、尊に謀反を勸めて天稚彦に殺さる（日本振袖始）

ゐあまのむらじ 猪甘連。 四百年前顯

宗天皇靈應し給ひし際、御糧を乞はれしを惜んで斬殺されき。後に弘法大師行道の時、軍大路にて猪甘の幽霊現はれて罪障消滅を請ふ。大師爲に説法し外五針御拳印を結べば、有難やと叫んで其姿忽ち五輪の石塔となり、幽魂石厨師仲成の體內に入りて誦判官勝藤に殺され、また檜原の牛の腹に宿りて守敏僧都に殺され、また大炊介仲經の一子と生れて餓鬼道の苦思を受けて殺され、遂に魔王となつて天上の果を得（隆慶天皇甘露雨）

ゑあはせ 繪合姫。 安藤左衛門入道聖秀

の女なり。五大院十郎宗房と婚するを嫌うて病を得、里見義助を供に連れて宿根に湯治に赴く途に、齋藤女治年行が犬輿を昇かせて來るに遇ふ。義助犬輿に纏せずして始めらる。繪合姫乃ち犬輿に禮して年行に謝罪す。これを目撃したる聖秀は犬に禮せるは不都合なり

とて繪合に勸當を申渡す。義助獨められて獄に投ぜらるるや、繪合眞物を携へて義助に逢ひ、悲願に暮るるを宗房に見付けられて獨められしが義助に助けらる。かくて後新田義貞の使者となり、夫義助と共に義貞の手紙と白旗を携へて父を訪ひ、義貞の義軍に一味するやう懇請す。聖秀乃ち意を決し、繪合を識して自刃す。繪合悲歎に暮る（相模入道千疋大

ゑもんのみめ 衛門姫。 越後國守長尾

輝虎の女なり。信州諏訪明神に夢語し、武田勝頼に逢うて相思の仲となり、信州國守村上義清に懐慕せられて勝頼と共に失踪し、諸方に放浪したる後勝頼の父信玄と天目山に逢ふ。甲越の戦解くるに及んで勝頼と婚儀を舉ぐ（信州川中島合戦）

をかへい 岡平。 平素無筆といひながら

三度飛脚より高師直の文を受取つて返事を認む。大軍力彌之を見て敵に内通するものと疑つて岡平に斬付く。是時由良之介外より歸る。岡平・由良之介に語つて曰く、自分は寺岡平藏の子の寺岡平右衛門なり。鹽谷家の恩顧を蒙りたる者なれば、師直に偽を傳へて油断せしむ。片時も早く下つて主君の仇を報じ給へとて師直の邸内を説明し、痛手に堪へずして死す（甚殿太平記）

まきの 荻野。 大阪新町遊廓扇屋の木夫

の妹女郎なり。夕霧の娘の春姫に遇うて傾城戀物語をなし、春姫を伴うて夕霧供養の場

まだまき 約巻。 足利義教の奥方の侍女

なり。奥小姐一色大炊介入常と密通し、屋根を傳ひて遁る（雪女五枚羽子板）

まのひめ 小野姫。 熱田大官司の女に

して悪七兵衛景清の妻なり。父が景清を庇護したる罪により捕へられて六波羅の獄に投ぜらる。小野姫は父を尋ねて京に上り、根原景季に捕へられて景清の行方を白状せしめんとして慘酷なる拷問にかけらる（出世景清）

まりかせ 中臣折風。 融大臣の傳なり。

白馬を牽きて脚に踏まず。後に悪人春主が融を一條坂町染殿屋に襲撃したる際、春風防戦して斃る（融大臣）

（・・・）

以上、近松が用いたる人物の多くは、時代物に於ては傳説或は史實に據つて脚色され、又世話物に於ては其の當時の巷説或は事實に基いて脚色されたるものなり。これ等のことは其傳中に一書述べたるもあれども、その類に堪へずして略したるもあり。